
君に、指輪を

ふも

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君に、指輪を

【ΖΖtheid】

Ζ2841Ζ

【作者名】

ふも

【あらすじ】

リズベットと結婚する意志を固めたキリスト。

そのために必要な物を手に入れるために駆け回る…予定。

自分の短編小説「武器は嘘をつかない」の一応続編。読まなくとも問題は恐らく問題はないです。

第一話（前書き）

リズベット可愛いですね！

第一話

窓から差し込む日の光とともに意識が浮上を始める。それと同時に右側に今までほとんど感じることのなかつた温もりを感じた。その温もりを手放したくなくて、体を右へ向けて抱きしめる。

「ん……」

そのせいで隣の温もりの主 リズベットが覚醒し始めたようだ。

「おはよ……あうと……」

まだ寝ぼけているのだろうか。いつもより語調が柔らかい。そう考えていると唇に柔らかい感触が訪れる。

「ん……、んう……。」

最初は唇を触れ合わせるだけだったが、たんだん口内に舌が侵入してきた。その心地よさにそのまま身を任せたい気持ちと、ここで目を空けた場合の反応見たさを秤にかけ、後者に軍配があがった。

目を開けると半ば夢の中のようなリズベットの半開きの口に移る自分が見えた。

と同時にリズベットの動きが止まり、顔を真っ赤になる。

「おはよう、リズ。」「……」

「ん?もう終わりか?」

「十九...」

「ば？」

俺は、思つたとおりの反応が見れた満足感と共に、機嫌を損ねてしまつたりズのフォローをどうしようかと考え始めた。

「起きてたんなら早く言いなさいよ。」

「いや、起きよつとは思つたんだけどまさかいきなり『ディープ…』

「言つな――！」

そういうて犯罪防止コードが働くか働かないかの絶妙な力加減でバシバシ叩いてくる。

「うめんうめん。地味に痛いからやめてくれ。」

「むう……。」

納得はしていない様だがとりあえず怒りの矛を収めてくれた。これ以上掘り返す気もないでの話題を変える。

「リズの今日の予定は?」

「今日中に抜けなきゃ行けない依頼は…、午前中一杯で終わるかな。午後は…その…」

キリストと一緒に…と言いながら、恥ずかしそうに視線を伏せる。その姿を眼福にしつつ自分の予定も告げる。

「じゃあ、俺は午前中はちょっと外に出でくるよ。昼飯には帰るから。」

「え? ビルに行くつもり?」

「ん? ちよつとな。馴染みに結婚の報告していく。」

本当は報告はすでにすませてあるので必要ないのだが、本来の目的を言つのは恥ずかしいのでそう誤魔化しておく。

「ふうん。分かった。」

表面上は冷静を装つているが、結婚といつ単語をきいたあたりで少し顔がにやけたことを俺の目は見逃さなかつた。そのことを指摘したらまた一悶着あつたが、それは別の話。

「さて…、どうしたものか。」

今のお出の目的は、実は結婚指輪を買つためだつたりする。サプライズプレゼントにするため、先ほどは誤魔化したのだ。しかし…

「指輪つて…たくさんあるんだな。」

今は手当たり次第に装備品を漁つてゐるが、どれを元にするかなかなか決めれずにいる。軒先にならんでいる指輪群をみてると、後ろから声がかけられた。

「あ、キリスト君。」

呼ばれて振り向くと、全身を白と赤を基調としたK.O.Bの制服に身を包んだ「閃光」アスナが片手を挙げていた。

「ちょうどここに来てくれた。」

「くつ?」

「なるほど……、リズへあげるための指輪ねえ……。」

一通り事情を説明すると、アスナは考え込むようにした後、らしくないニヤニヤとした笑みを浮かべてきた。

「な、なんだよ……」

「ぐつぐつ。ただキリト君にもそんな気遣いができたんだなあつて。」

「悪かつたな。で、どうなんだ。協力してくれるのか?」

自分で選んでも埒があかないと考えた俺は、たまたま通りかかったアスナに協力を求めるにした。

「うん、いいよ。大事な友達のためだし。キリト君が選んだら、最終的に食べ物になりそんなんだもん。」

「アスナのなかだと俺はどんなキャラなんだ……」

まあ、言われなくともアスナの顔を見るだけでだいたい分かつてしまつが。苦い顔をしてそう考へていると、いきなり手を掴まれた。

「わあ、そんなことは置いてといて、買い物行くよ。」

「あ、おこ、引っ張るなよ。」

「じやあ置いてよ。」

「それも困るー。」

やつ葉を交わしながら、俺たちはいつなる雜踏へ踏み込んだ。

第一話（後書き）

そんな長くは書かない予定です。でもかそんな長くかけない…

第一話

「で、ビルに向かってるんだ?」

「あたしがお世話になつてゐるお店。」

アスナに引き連れられること早一〇分。転移門をくぐり抜け、ついに先の街でさらに進んでいるが一向に到着する気配がない。

「なあ、俺脳にはリングダースに一応戻らなきゃならんのだが……」

「もうすぐだから。ほら、そー。」

そう指差すアスナの指先を追うと、装飾品を売っているとは思えないほど質素な店が構えられている。心配になつた俺はアスナに訪ねた。

「紹介してもらひてなんだけど、大丈夫なのか?」

「店主さんは氣むずかしいけど、腕は確かだから。」

その言葉を信じた訳じゃないが、他に行く宛があつたわけじゃないので仕方なく店に入ることにする。

「おはよウジヤエコモ～す。」

そんなアスナの声と共に店の扉をくぐる。するとその先には椅子に座つてゆつたりと寝ている妙齢の女の人人がいた。

顔はアスナとは違うが、確実にきれいな部類に入ると考える。カーマインという現実離れした色の長い髪が綺麗に流れ落ちている。着ている洋服はNPCで売られている物とは比べるのも失礼と思われるほど細部にまでこだわられたものだ。しかし、客が入って着たのに寝たままなのか…。

「アシュレイさん、起きて下さい。お客ですよ？」

アスナはこの状況に慣れているのか、近づいて女性の体を揺さぶり始めた。

「うーん。あと5…」

「5分で起きてくれるんですか？」

「…5光年…」

そんな的外れの回答が聞こえてずっとこうになってしまった。

「5光年って、時間じゃなくて距離ですからー」冗談言つてないで起きて下れーー

アスナは懲りずに起こし続ける。そんなやりとりが5分ほど続いた後に、ようやく女性は起きたらしい。

「あー、眠い。誰、あたしの貴重な睡眠時間を邪魔したのは。」

せっかく綺麗な顔なのに、今は睡眠を邪魔されたせいか、不機嫌そ

うに歪んでいる。周りを見渡して、アスナ、次いで俺の顔を見つめた後にとんでもない発言をしてきた。

「なんだアスナか…。なあに?」テート用の服を意中の彼と買いに来たの?」

そう告げられた瞬間、アスナの顔はアシュレイと呼ばれた女性の髪の色よりも赤くなつた。

「ちつ、違いますよ! それに彼にはすでに相手がいますし…」

「そりなの? でも前聞いた話と違…」

「その」とは忘れて下さること…。

どうやら女だけの秘密のやつとりがあつたらしく。つっこんで聞いてみたが、俺の目的をこれ以上遅らせる訳にはいかないので黙つておくこととする。

そんな感じでひとしきりアスナがからかわれ終わつたあとで、女人はようやく俺に話しかけてきた。

「アスナで遊ぶのはこれまでにして、君の名前は?」

「俺はキリスト。ソロだ。」

「あたしはアシュレイ。で、君は何が欲しいの?」

氣怠そうに聞いてくるアシュレイ。さつきからのやつとりを見ていると不安なことこの上ないが、一応伝えてみる。

「俺は近々結婚するんだ。そのときに贈る指輪が欲しい。」

「指輪ね……。」

そう聞いて考え込むアシュレイ。どうするべきか戸惑つていると、向こうから話を続けてきた。

「じゃ、『クリスタライト・インゴット』と、『エヴァーラスティング・ストーン』を持ってきなさい。」

「は？」

いきなり言われた、しかも両方とも武器用の鉱石だったので指輪とは結びつかず、つい間抜けな声をあげてしまった。アシュレイはそんな俺にかまわず続ける。

「早く持ってきたらそれだけ早く作ってあげる。だからせつと行ってきなさい。」

それを告げたきつ、アシュレイはまた目を瞑つてしまつた。

「は、はあ……」

呆然としていると隣に立っていたアスナから声をかけられる。

「よかつたね、ちゃんと引き受けてくれて。アシュレイさんはその時の気分で断つちゃうことがあるから。」

そう言って苦笑するアスナ。俺もつぶ苦笑を返す。

「それかわりとんでもないものを要求されたけどな。」

「『クリスマスライト・インゴシト』と『エヴァーラスティング・ストーン』だっけ？ 最初のはいいけど、後のは…ね。」

そうなのだ。『クリスマスライト・インゴシト』はまだいいが、2つ目の中のは少々やっかいなのだ。どうするか悩んでしまう。

「ねえキリスト君。」

「なんだ？」

「時間、大丈夫？」

「時間？」

そうこいつて確認してみると13・20といつ表示が田に入った。

「やつばーーもつ帰らなきやーーアスナ、今日はありがとう。じゃあ。

」

そう言ってアシュレイの店を飛び出す。そこから自分の敏捷性を最大限に發揮してリズベットの店に走り出した。

第一話（後書き）

どうでしょ、うか第一話。これから他のキャラも出してこく予定です。
しかしそれするとコズベットとの絡みが…。

第三話（前書き）

投稿が夜になってしまった。
明日投稿できるか微妙です（^_^-;）

第二話

『リズベット武具店』に到着したのは、14時を少し回ったあたりだった。敏捷性がいくらあるようと、町の中だと半減しててしまう。リズ怒ってるんじゃないかなあ……と思いつつ、扉を開ける。

「す、す、」

扉の先に見えたのは、スミス専用装備のハンマーを抱えながら穏やかに眠っているリズの姿だった。思わず部屋の中に入るにも慎重になってしまふ。起こさないようこそこそとリズの傍へ近寄る。

「すー、すー。」

どうやら疲れているのか、近寄った程度では起きないようだ。その顔を間近で見てみると、ふといたずら心が湧いてしまった。

むにっ、とリズの頬を右手でつまんでみる。リズの素肌は何度か触つたことはあったが、そういうた時とはまた違つた触り心地を感じる。

「ふー、ふー。」

俺が頬をつまんでるせいで少し呼吸がしづらいのだろうか。しかし、俺はやめる気にはなれなかつた。今度は左手でもつまんでみる。

「ふにゅう……」

さすがに気になるのか、リズは少し声をあげた。そんな顔になつて

も一種の愛嬌がある」と「吹き出しあつになるのを必死にこらえる。

「きこと…、必ず…帰つて…」

そんな言葉にはつとなる。この少女は夢の中でも俺のことを見配してくれているのだ。

「君は、俺が守る。」

頬から手を離して大切な少女への思いを確認する。リズが少し笑つた気がした。

それから少しして起きたリズに「遅いー！」と怒られた後に昼食となつた。料理スキルの熟練度はそう高くないはずだが、リズの手料理はおいしかつた。ありがちなことではあるが、「料理は愛情」ということだろうか。

ご飯を食べた後は最近買った一人掛けのソファに並んで座り、今日の予定を話した。話している内に別の話になり、気が付いたら夕方になつてしまつたのはご愛敬だろう。デートはまた今度行くということになつた。

「えつ！？何日か家を空ける？」

「うん、えーと、ちょっとクエストアイテムが欲しくて。今はベッドの中。リズと一緒に布団にくるまつてている状況だ。一緒に寝るのはあの夜以来だ。

「だったら私も一緒に…」

「リズは店があるだろ？」「

「だけど…。」

心配そうな顔をしているリズに笑いかける。

「大丈夫だよ。格下のクエストだからさ。」

「なにが欲しいの？買えないの？」

「…『エヴァーラステイング・ストーン』…」

「あ、あの『月夜のゴーレム』の？」

『月夜のゴーレム』とは、クエストの名前だ。満月の夜に現れる特別なモンスターを出すためのクエストで、『エヴァーラステイング・ストーン』はそのモンスターしかドロップしない貴重品だ。ちなみに、俺の今のレベルと比較すると、適正レベルは20は低い。

「な？だから余裕だつて。」

「けど、あそこは『軍』が囮つてしまつてゐるじゃない。」

そうなのだ。アスナやリズや俺が思わせぶりな態度を態度をとつて
いるのはそれが原因だつたりする。毎月この時期になると、『軍』
がモンスターの狩り場を占有してしまつてゐる。そのせいで『エヴ
アーラスティング・ストーン』を手に入れるためには軍から法外な
値段で買い取るのが現状唯一の入手法になつてゐる。しかし、俺は
金を払う気はないので、別の手段をとることにした。

「大丈夫だ。奴らがキャンプし始めるのは2日前。明日から張り込
めばあいつらの先手を取れる。」

「だとしても、いくらキリトでも7人パーティーよりダメージを出
したりはできないじゃない。」

通常、アイテムの入手権はエンドアタック、つまりどぎめを刺した
人に与えられる。しかし、このクエストのモンスターは特殊で、ま
ず攻撃してもHPバーが減らない。そいつは出現時間に制限があり、
その間に一番多くダメージを与えたパーティーのリーダーにアイテ
ムがくる様になつてゐる。単純計算、7人のフルパーティーでくる
『軍』のパーティーにダメージで勝つことはできない。

「それも大丈夫だ。クライン達に応援を頼んであるからな。」

「クライン…つて、『風林火山』の？」

「そ。まあ、それなりの代償は払つたけどな。だから大丈夫さ。」

「それなら…、大丈夫なのかな?」

ようやくリズも納得したらしく。しかしどこか不安そうに服を掴んでくる。そんなリズの不安を和らげられるようにきゅっと抱きしめる。

「じめん、どうして必要だから。大丈夫、用が済んだらすぐ帰るよ。」

「うん…。気をつけ。」

そう言ってキスを交わすと、リズは目を瞑った。その口から落ち着いた寝息がこぼれるのを確認すると、俺も明日に備えるべく、眠ることにした。

第三話（後書き）

次はクライインと…、もう一人出す予定です。20も格下のクエにしたのは、ひとえにこいつを出すためだつたりします。結構強引ですがね（^_^;）

第四話（前書き）

一回一話とか無理ですね(^ _ ^ :)

2~3日に一話のペースでいけたらと思います。

それとも周1にして一話の文量を倍にした方が読みやすいんですね…

「ポーション持った？ 食べ物持った？」

「もひインベントリ共有なんだけど…」

「それで、一応確認するもんでしょ。」

「まあ、悪い気はしないよな。」

出発前の再確認。一人でインベントリの中を確認する。それを終えると俺は玄関に立つ。

「じゃあ…、そろそろ行かないと。」

「はい。キートの剣。気合を入れて整備しておいたから。」

そつこつて俺の一本の剣を渡してくれる。俺は黒い剣を格納し、白い剣を背中に差し替げる。

「ありがと。じゃ、行ってくる。」

「うそ、気をつけろ。」

でる前にキスを交わして、俺は扉を開いた。

「おひ、遅えぞキリスト。」

「お前が早すぎんだよ、クライイン」

待ち合わせの転移門に着くと、すでにクライイン達、ギルド『風林火山』の面々が揃っていた。

「そりやあお前が恋人のために頑張るってんだ。俺らも一肌脱いでつて気になるだろつよ」

「じゃあ、報酬は結婚祝いの前払いといふことでいいやないな。」

「それとこれは話が別だ。」

そんな感じでひとしきり雑談に興じていると、遠くから声が聞こえてきた。

「遅れてすみませーん」

そう言いながらこちらへ向かってくるのはシリカと使い魔のピナだった。彼女とは35層の迷宮区で知り合った。俺は彼女を利用した形となつたので嫌われたと思ったのだが、そういうことはなく、末だに友達付き合いが続いている。ちなみにリズに指輪を贈ることを勧めたのも彼女だ。結婚報告をしたときに言わされたのだが、その時のやりとりは、

「じゃあ、当然指輪とかも用意してありますよね？」

「いやあ…特に考えてなかつた。」

「何言つてゐんですか！女子としては結婚指輪はウエディングドレスと同じくらい憧れるものなんですよー！」

「そんなもんなの？」

「わうなんです！なんなら一緒に選んであげますから、一緒に買い物に行きましょー！」

「いや、さすがにそれは…」

たしかこんな感じだつたはずだ。その後やたら一緒に買い物に行くことを主張されたが、さすがに迷惑になるので丁重に断つた。そして、昨日報告したら、クエストに付き合つてくれるといつ。人數がないことには始まらなかつたのでお願いした次第だ。ちなみに彼女がどれくらい頑張ったのかわからないが、そろそろ攻略組に入れるんじゃないかといつほどのレベルに上がつていた。

「時間にはまだ余裕があるよ。今日から4日間よひじへ。」

「は、はいー任せとけー。」

シリカと話していると、あの男の横槍が入つた。

「おこキソト。もしかしてこの子か？」

「ああ、この子がシリカ。短剣使いだ。シリカ、こいつはクライン。ギルド『風林火山』のリーダーだ。あっちにいるのはそのメンバー。彼らも一緒にパーティーだ。」

俺がそう紹介すると、野郎達は各自手を挙げたり、口笛を吹いたりして挨拶代わりにする。一人怪しい田つきをしているやつがいるが、それは無視する。対するシリカは卒のない笑顔を向けて

「初めてまして。私はシリカといいます。この子は友達のピナです。」

そう挨拶する。それに合わせるように隣で浮かんでいたピナもきゅるっと鳴き声をあげる。そんなシリカを見てクラインは

「もうちよつと大きかつたらなあ……」

なんてことをつぶやいていた。とりあえずクラインはどうしてやり、

「そ、全員揃つたし、そろそろ行こう。」

俺がそう宣言すると、全員がそれに答えるように転移門へ歩き出した。

第四話（後書き）

俺の中ではクラインは女好きですが、ロリコンではありますん（笑）
ロリコン案も考えたのですが、別にシリカとクラインをくつつけた
い訳じゃないので却下。

そしてリズキリ小説のはずなのにリズベットの出番ががが

第五話（前書き）

投稿が遅くなってしまった(^ _ ^ ;)

まあ、土日は書かないのですが(笑)

戦闘描写難しい…

第五話

この層の迷宮区のは遺跡の様な感じになつていて。そこに出でてくるモンスターも岩で作られた『ゴーレム』などの物質系が多い。

「と思つてゐるそばからか。」

前から向かつてきたのは『ロックゴーレム』だ。ゴーレムは複数出てこない代わりに、他のモンスターよりパラメータが高く設定されている。特に攻撃力と防御力は3層は上のモンスター程度に設定されているらしい。

「じゃあさつさと『づけ』ようか。」

そう言つて剣を抜いて構える。

「はい。」

それに答えるよつにシリカとピナもでてくる。

「俺らはいらんだろ?」

そう言つてくるのはクライインをはじめとする『風林火山』の面々。

「ああ、次頼む。」

この場所は通路が狭いため、3人も並ぶとほぼ身動きが取れなくなつてしまつ。

まあ、それ以前に俺のレベルなら一人で十分倒せるのだが。クライ

ンは怠けるように言つてはいるが、いつでも切りかかれるように刀の柄に手をかけてい。そのあたりはさすがギルドリーダーか。

「キリストさん、さあす。」

「まずは俺が行く。いいね。」

「わかりました。」

そう打ち合わせると、俺は前にでて相手の攻撃を誘い、体を引くタイミングを計る。案の定腕を振り上げて攻撃してくる『ゴーレム』。腕が降りてきたタイミングで引くことで、攻撃を空振らせて硬直をつく。それをなんどか続けて、A-Iが学習してきそうなところで片手剣スキル『ヴォーグバルストライク』を放つ。

敵の振り下ろしてきた腕とぶつかり、お互に硬直が生まれる。そこで

「スイッチ！」

「はい！」

シリカが飛び込んでくる。短剣の突撃スキル『ホワイトバイト』だ。そこからシリカの連撃が始まる。

「えい、やあ、たあ！」

声は可憐らしいが、ゴーレムのHPはすさまじい勢いで減っていく。

「さやあー。」

連撃の締めで敵にパリィされた様だ。互いのHPが減る。

「あらわるわる」

そこでピナがヒールをかけることによりHPが右端まで回復する。それを見ながら俺も間に入りとどめにかかる。その後俺が連撃をたたき込んでいる途中で敵のHPが死き、俺のとどめの一撃は空を切った。

「ふう、お疲れさま。」

「やっぱりキリストさん強いですね。私なら後一度連撃を入れても倒せませんし。」

「いや、シリカも強くなつたよ。ピナとの連携こそひりこ磨きがかかつたかな？」

「ふふつ。ありがとうございます。」

そう笑つて答えてくれるシリカ。そして、

「キコトよ…。終わつたなうせつてござります。」

恨めしそうに言つてくれる男がいた。

その後は先頭を代えつつ先に進んでいく。

「こんな場所に」でるなら月関係無い氣はしますけど…

「IJの遺跡を抜けた先に広場があって、そこだけ月明かりが差し込む様になってるからね。」

「なるほど…」シリカの疑問に答えたり、

「 なあキリト。もしかして他にも可愛い女の子と知り合ってるんじゃないだろうな。俺らは友達だろ。隠し事は無しだぜ。」

「 仮に知つても今のお前じや危なくて紹介できねえよ…」

クラインの話を流したり、

「 キ…キミ…何歳? 俺は…」

「 えつと…私の…。」

「 「 IJいつはだめだああーーー」」

少々危ない奴をクラインと一緒にで殴つたりしながら歩いている内に目的の場所へたどり着いた。

「 IJがゴーレムのポップ地点か…」

「なんだか不思議な場所ですね…」

「『ルート』には他のモンスターは出ないらしいな。」

たどり着いた場所は遺跡の中央部。最深部にはこの層のボスがいた。今まで壁にある松明の明かりを頼りに進んできたが、ここには松明がない代わりに月明かりが降り注ぎ、青白い光に照らされている。すべては電子データだと分かつてはいるが、今までとは違う、静謐な空氣に包まれている。

「ち、明日は『軍』と一悶着ありそうだし、今日は早めに寝て、明日に備えよう。」

「そうですね。」

「了解」

そして、野営の準備に取りかかった。

第五話（後書き）

あ、シリカのスキルについては俺のオリジナルです。書き間違いだつたりはしませんので~。

スキル名を考えるのが一番難しいですな(^ _ ^ ;)

第六話（前書き）

30分間指がノンストップで動きました。シリカの気迫に押された
気がした…

第六話

適当に済ませた夕飯の後、クラインの提案で休む時は交代制にて見張ることになった。たとえ安全地帯でも、圏外では警戒して過ぎるのではない。二人一組（一人余るので一組は3人）の3交代制として、組み合わせはくじ引きで決定した。

「…チクショウ。」

うらめしそうにひらめいているクライン。

「お前が提案したろ…」

俺も朝からなにかと絡まれて疲れてきた。組み合わせは、（キリト・シリカ）、（クライン、ロリコン）、その他3人という結果だ。クラインがなにを考えているかは分かるが、交代する気にはなれなかつた。

「じゃ、俺とシリカが最初見張るから、後からよろしく。」

「分かつたよ…」

そんなやり取りがあり、今起きているのはシリカと俺だけだ。最初はぼつぼつと話していたが、今は会話も途切れ、ただ一人でランタンを囲んでいる。シリカの顔は伏せられているためによく見えない。しかしそこはかとなく赤くなっているように見える。そんな感じで観察していると、

「キリトさん。」

と声を掛けられた。

「ん? どうした?」

「えっとですね…」

「あの」とか「その」とか煮え切らない様子で言っている。彼女の耳は最早真っ赤を通り越して湯気が出そうなくらいになっていた。そんな状態が数分続いたところで、シリカがぱつと顔を上げた。

「キリトさん…」

「はいー」

つい驚いて変な返事をしてしまった。しかしシリカは気にならないのか、そのままの勢いで続けた。

「あなたが好きです!! 私とお付き合って下さい…」

俺の中で時間が止まつた。彼女は今なんと言つた…?

目を見開いたまま固まっている俺の様子を見かねたのか、シリカが

声を掛けてくる。

「あの…、告白しておいてなんですが、答えは決まっていますよね?
？」

その声で俺の時間は動き出した。

「うん…。」めん。それは出来ないよ。大切な人がいるから。」

「はい、分かってます。」

そう言つて微笑むシリカ。普段の明るい笑顔と違つて、その顔は見
れるほどに綺麗だつた。

「ならどうして…？」

「私の気持ちを知つておいて欲しかつたからです。」

そこで一旦切ると、シリカは続けた。

「たとえゲームでも、私は遊びで人を好きになつたりはしません。
私の本気を知つていてもらいたがつたんです。だから攻略組に参加
できるように頑張つて、そのうちキリトさんと一緒に場所に立てる
ようにな。」

彼女の顔は相変わらず笑顔だが、先ほどとは違つて強い決意が伝わ
つてくる。

「でも俺はリズが…」

「それはわかつてます。今はそんな簡単に振り向いてもらえるとは

思つてこません。」

けど、と彼女は続け

「現実に戻つたら第一パワンド、はじめをかじりこますからね。

そんな宣言は俺は苦笑しながら返す。

「できれば、遠慮したいな。」

「拒否権、あると想います?」

「ない、だらうな。」

「よく分かつてゐじやないですか。」

そう呟げたシリカの顔は、いつものような明るい顔の様で、少しこたずりつめながら混ざつていた。

ちなみに、このやつ取りを聞いていたクライアントロココンがいる

絡まれる」となったのを、この際見たんだ。

第六話（後書き）

「」で切るか続きを書くか悩んだのですが、今までの文章量と、話題の切り替わりを考えてここで投稿することにしました。

クライイン…；；

そしてロリコンに名前を付けよつか思案中。よければ名前候補なんかを感想やメッセージにでもらえれば、オリキャラとして見せ場を一つくらいつくる…かも？

第七話（前書き）

スキルの名前が思いつかないので、「まかし」まかしこともす（^_‐）

「起きたキートー！」

朝までの見張りを終えて、シリカと一緒に（もちろん別のテントを使つた）寝っていた俺をたたき起こしたのは、起床アラームの緩やかなリズムではなく、もちろんここにはいないリズの優しい声でもなく、一緒にパーティーの両手剣使い（ロリコン）の切羽詰まつた怒鳴り声だった。

「どうしたー？」

安全地帯と見張りがいることに気を抜いていたのか、接近アラームに気が付かなかつた自分に舌打ちしつつ、剣を片手にテントを飛び出した。その先にいたのはトレーデマークとなつていて揃つた装備に身を包んだ集団。

「軍のおでましか…」

クラインは先頭に立つて軍の代表者と何事か話している。しかし両者の剣幕を見ている限り友好的な対話は望めそうになさそうだ。近づいてみると会話の内容が聞き取れるようになつてきた。

「いひこひのは早いもん勝ちだろー！」

「アイテムが欲しければ売つてやる。だからそれだけ。」

「やついつ問題じゃねえだろー。ふざけるのも大概にしやがれー！」

「のままだと飛びかかりそうな勢いのクラインを止めねべへ声を掛ける。

「クライン、こぐらなんでも熱くなりすぎだ。」

「キリスト…」

横槍を入れられたことで冷静になつたのが、こちらを向いてくるクライン。その様子を見て、とりあえずは大丈夫そうだと判断し、俺は相手に向を直る。

「君は？」

「俺はキリスト。ソロだ。ついでに今はこのパーティーのコーディーダーでもある。」

「アイシングクラッシュ解放軍のライシ少佐だ。」

ライシはいつも見下すような格好をとる。俺もそれに答えるように下から睨み上げるよつとする。

「で、そのライシさんがなんの用だ？」

「我々の狩り場を不正利用しようとしている輩がいるのでね。注意していたところだ。」

「我々の狩り場？」

「やうだ。この場所は我々の管轄下にある。勝手な行動は慎んでもらおう。」

「管轄下つて…、まあいいや。明後日には帰るから大田に見てくんないか？」

「我々は明日のクエストこなすという任務あるのだ。それを妨害しないのであれば考え方よつ。」

「結局そこか。実は俺らもクエストアイテムが用意しておる。」

「アイテムが欲しければ軍本部に行けば販売しているので。」

「あいにく、『軍』の法外な値段じゃ買つ気が起きなくてな。」

「ならば諦めて立ち去れ。」

「…嫌だといつたら？」

「実力行使も辞さない。」

その言葉で全員に緊張が走る。

「…といいたいところだが、一応グリーンプレイヤーの様だ。ここは決闘で決めよう。私に勝てばこの場を譲りう。そうでなければ立ち去れ。どうだ？」

そういうて手に持ったハルバートを構えてくるライツ。俺は背中の剣を抜いてそれに答える。

「いいぜ。場所はここでいいか？」

「まづ、躊躇せずにかかるべく。よほどの馬鹿か、あることは…」

「御託はいいからさつと始めるなら始めよ。」正直眠いんだ。

「わかった。では、」

そう言ってワイングドウを操作するライツ。すぐに田の前に決闘を受けるかどうかのワイングドウが浮かんできたのでOKボタンを押した。

真正面から突いてきたハルバートを反射的にかわす。そこから反撃に移ろうとするとそれを許さないように続くライツの連撃が迫る。それらを受け流し、敵の硬直を狙つたが、

「遅い」

その声と共に右から敵の刃が迫った。その軌道に反射的に剣を置く。同時に武器がぶつかり合う甲高い音と共に止めきれなかつた勢いのまま、吹き飛ばされた。

「ほう、よく止めたな。さすがは『黒の剣士』。」

俺を吹き飛ばしたままの姿勢で声を掛けてくるライツ。

「いや、かなり危なかつたよ。正直間に合つたのは運が良かつた。」

「俺は倒れたまま、ウインドウを操作する。

「どうする？ 隆参するか？」

「冗談……。」

操作が終わつたウインドウを閉じて立ち上がり、

「バレても隠す必要もないよな。」

両手に持つた剣を構える。

「『『一ノ刀流』か…、いいだろ？』

そう言って再度ハルバートを構えるライツ。俺たちの間に緊張が走り、その緊張が限界を迎えると同時に、俺は駆け出した。

第七話（後書き）

二刀流キリト君は次話持ち越しで(^ー^;)さて、ヒースクリフ戦でも読み直すか：

第八話（前書き）

一応最終話です……が、つまみ話まとめのことが出来ずいつもの倍以上の量に…

ライツの突きを右手の剣で受け流す。それと同時に左の剣を突き出す。しかしリーチの差でギリギリバックステップで距離を取られる。

「その長いリーチ、やつかいだな。」

「攻防を同時にこなせるそのスキルも優秀だ。」

言葉を交わし終えるとまた同時にぶつかり合つ。二刀流突撃技『ダブルサー・キュラー』と、向こうの『レイトラスト』。両者の技がぶつかり合い、互いのHPを削り合う。その後も俺は奴の攻撃を受け流しては反撃し、奴は反撃をリーチ差から来る時間的余裕を最大限利用し回避する。互いが致命的ダメージを与えれずにいた。しかし、俺にはあまり時間は残されていなかつた。

「そろそろ体力が心許ないのでないのか？」

「『』心配ありがとうよ。」

俺は先ほど吹き飛ばされた分だけ余計にHPが減つていて、このままHPの削りあいとなれば、先にHPが尽るのは俺だった。

「はあー！」

もう何度目かも知れない奴の突き。俺はそこを片手で受け流さずにつ、両剣を交差させたあたりで受け止めた。

「むつ

「たああああ！」

俺はそこから奴の武器を跳ね上げて接近。最上級連撃『スター・バー・スト・ストリーム』を放つ。その連撃に、長い獲物をもつライツが、至近距離のこれを凌ぎきれるかが、勝負の鍵だ。

後三撃

後一撃

後一撃

「だあああ！－！」

スキルを出し終えたが、奴にはついに直撃をあてることが出来なかつた。敗北を覚悟すると同時に目の前にウインンドウが現れる。そこに書かれていたのは俺が勝利したというものだつた。

「あれ？」

思いがけない結果に呆然としてしまう俺。

「なにを呆然としている？ 勝ったのならばそれなりの態度でいて欲しいものだが。」

つい先ほどまで俺と闘っていたとは思えないくらいしっかりと立ち、ポーションを飲みながら俺に声をかけてくるライツ。

「俺は勝ったのか…？」

思わず田の前の男に尋ねてしまつ。

「君より先にこちらのH-Yがイエローラーンに入ったからな。」

と、こともなげに答えるライツ。一撃決着のルールがなければどちらの勝ちだつた。と付け足していくあたり納得はしていないようだ。

「どうあれ負けは負けだ。今回は譲らう。」

「案外あつやつと引き下がるんだな。」

「いやが決闘で決めよつと書つたのだ。約束は守る。」

そう言つてこちらに背を向けるライツ。

「しかし、次は負けん。」

そしてそのまま、仲間を引き連れて去つていつた。

そのまま『軍』の奴らが立ち去つていった方を見ていると、後ろからすこし勢いで叩かれた。

「よくやったキリトオ！！」

「あんまり強く叩くな、ＨＰが減るじゃねえか！－！」

そう言つてクライン手を払う。

「どうせバトルヒーリングですぐ回復するじゃねえか。ケチケチすんな。」

「あのなあ……」

「さすがキリトさんですねー…さうに好きになりそいつですー！」

そう言つて左腕に抱きついてくるシリカ。一瞬良いかな…と思つてしまつたが、リズへの罪悪感がその気持ちを綺麗さっぱり流してくれたのですぐにシリカから離れる。

「ありがとう。でもルールが無けりゃ負けてたから…。」

「ルールでもなんでも、勝ちは勝ちですよー！」

「まあ、そうなんだけどさ…。」

そこから他のメンバーからの祝福？を受けることになり、なぜか手持ちのアイテムでプチパーティーまで開いてしまつた。そのパーティーが終わつた後は全員気を失つように落ちてしまい、気が付いたら『ゲーム』が出現30分前で全員が飛び起きて、慌てて準備するこ

とになってしまった。

ゴーレム戦は、競争相手もいなかつたので、全員で攻撃してはスイッチを繰り返し、『エヴァーラスティング・ストーン』を簡単に入手することに成功した。

そのままの足で街へ戻り、俺はみんなへのお礼のレアアイテムを渡すと、あいさつもそこそこにエギルの店へ向かつた。もう一つのアイテム、『クリスマスライト・インゴット』を手に入れるためだ。

店に着くと、エギルがいつものようにあくびに商売を行っていた。

「ローガーディアンの破片4つで3000コル！」

「4つで5000コル！」

「3500！」

「4500！」

「4000！..」

そう言い切るエギルの迫力に勝てなかつたのか、少しだけ首を縦に振ってしまう片手剣士。エギルがそれを見逃すことなく、相手の頭をバシバシ叩いて

「よつしゃ決まりだ！4つで4000！」

ちなみに『ローガーディアンの破片』は優秀な防具を作ることが出

来る素材アイテムで、相場は確か一つ二〇〇〇くらいのはずだ。

俺はエギルに近づいて声をかける。

「あくどい奴だな。相場の半額だぞ？」

「ん？ ああキリトか。注文の品はもうキープしてあるぞ。」

そう言ってアイテムを実体化させる。その手に現れたのは、リズと一緒に取りに行つたこともある、見覚えのあるものだった。

「お前が入手方法を公開したおかげでこいつもずいぶん手に入れやすくなつたもんだ。」

そう言ってアイテムをトレード欄に入れてくる。俺も代金分のコルを入力し、決定ボタンを押す。

「まいどあり。じゃ、さつさと帰つてやんな。愛しのあの子の元へ。」

「

そう一ヤリとわらいながら告げてきたエギルをとりあえず呻くと、俺はそのままエギルの店の一階へ向かった。

飛ぶようにリズの元へ向かう。敏捷性スキルを存分に発揮し、店の二階から飛び出すと、猿よろしく屋根を飛び移りながら移動する。眼下に目的の店が見えるとすぐさま飛び降り、目の前の扉を吹き飛ばす勢いで開ける。

「ただいま！ リズ！」

「おかえつーキコトー！」

迎えてくれたリズをすぐさま抱きしめた。しばらくそのままの姿勢でいたが、お互にが満足したあたりでじりりからともなく離れる。

「わっしゃくで悪いんだけど、ちょっと付きて欲しいんだ。いいかな？」

「えっ？ 帰つて起きあぐんで出なへても、少しひらい休んだら？」

「じつしてもあぐんで行きたいんだ。今日の仕事は？」

「今日のまづ終わったから…。」

「じゃあ決まりだー行こー！」

「えっ？ あっ？ あひみひとキコトー…。」

リズベットの手を握ると、俺は再度街へ飛び出した。目的地はもうろんマシュレーの店だ。

「おーー言われたものもつてきたぞー！ 早く作ってくれー！」

レジストリーフィルタの構成

俺は店に踏み込むと大声でアシュレイに呼びかけた。事情を分かつていな（教えていない）リズベットは戸惑いを隠せないようだ。

「おい！アシュレイ！いないのか！？」

「えつ? アシュレイつて? あの?」

「惑うリストベットを余所に、俺はアシエレイを探す。」

「アシ」

〔 〕

俺の声を文字通り吹き飛ばすようにして店の奥から出てきたのは先日見かけた服とはまた違つたものをして居るアシュレイだ。しかしその顔はこれ以上ないほどに不機嫌そうにゆがめられている。

「…………」
「…………」
「…………」

指輪さえ作ってくれれば叫き出そんが何しゆんかかまわないや

アスナの紹介じゃなきゃほんとに話をしてるのに…

そういうつて舌打ちするアシュレイ。その様子を見ていたリズがおそるおそるといった感じで声をかけてくる。

「ねえキリト、この人誰？アシュレイって言つてたけど、あのアシ

コレイさん?」

「たぶんリズの考へてるアシュレイで合ひてゐるんじゃないかな。少なくとも俺はアスナにそう言われた。」

「それはとりあえずわかつたけど、指輪? 一体どうなつてゐるの? キリストが最近泊まりがけで狩りしてたのと関係してゐるの?」

「ああ、それは後で説明するよ。ちよつと待つてて。」

「そう言つて俺はアシュレイに向き直る。するとひびき不機嫌そうになつたアシュレイがいた。

「あたしを呼びつけたくせにさらに寛たせられて? ほととぎ放り出すわよ。ていうかもう限界。放り出してやる。」

「そう言つて威圧感たっぷりに近づいてくるアシュレイ。さすがにまずいので、なだめることにする。」

「わ、悪かった。謝る。だから指輪を作つてくれ。」

その謝罪がよかつたとは思わないが、アシュレイは頭を搔きながら、「仕方ないわね…。わざと物出しなさい。」

そう言つて手を差し出してくる。その手に俺は『クリスタライト・インゴジット』と『ヒュヴァーラスティング・ストーン』を渡す。それを受け取るとアシュレイは後ろへ歩き出し、

「んじや、あたしは作つてくるから、あんたらは適当に時間潰して

なさい。」「

そう告げると奥へ引っ込んでしまった。残されたのは俺と、事情が全く飲み込めていないリズベット。

「で、どうにこうとか説明してくれるのよね?」「

そう聞いてくるリズベットに俺は、どこから説明するべきか考え始めるのだった。

リズベットへかいつまみながら最近の話を教える。そうじていろうちに奥からアシュレイが戻ってきた。

「ほら、出来たわよ。」

そう言って指輪を投げてくる。俺がそれを掴むのを見届けると、寝る、と告げて奥へ引っ込んでしまった。俺は手元にある指輪へ目を向ける。銀と青の模様が交差している。結婚指輪といふことで、宝石のたぐいはついていない。遠目から見るとシンプルだが、手の中にあると所々に細かい装飾が施されており、制作者の技術の高さがうかがえる。

「それがキリストの欲しかったアイテム?うわあ……、綺麗……。」

指輪を見ていると横からリズベットがのぞき込んできた。俺はそのリズベットに向き直る。

「なあ……リズ。」「

「ん?」

「これ…」

そう言つてリズベットへ指輪を差し出す。リズベットは最初はぽかんとしていたが、意味を理解したのか、赤くなつてうつむいてしまう。

「これって…。」

「うん…。結婚指輪だ。」

そう告げるとリズベットはさらに赤くなり、感情表現用のプログラムの最高値ではないかといつほどになつてしまつた。しかし俺もかなり赤くなつていることが自覚できる。

「じゃあ、手を…。」

「あつ…」

俺はリズベットの手を取ると、その手の薬指に指輪をはめる。指のサイズは聞いていなかつたが、なぜかサイズはぴったりだった。

「これからも、よろしく。」

そう言つと、リズベットは最高の笑顔で答えてくれた。

第八話（後書き）

本当のあとがきはこれから次話投稿でかきます。

ところわけで、SAO一次創作「君に、指輪を」どうだつたでしょうか。まあ…通勤の暇に書いたお手軽かつ初めての複数話投稿なわけで、反省点は多々あるわけですが(へへへ)

SAOの知識が足りていらない

いやあ、本編でちゃんと描写されているものなのに、思いこみで書いてしまっているところが多くありますね(へへへ)決闘とか。これはもつとたくさん読むしかないですね…。

話のまとめのタイミング

七話と八話ですが、七話を書き終えた時点ではもつと長くキリトのデュエルを書く予定だったのですよ。でもふと考えて

「あれ? リズ出番少なすぎね?」

と思い急遽削減。そのせいで最終話ネタもひっぱっていれるをえず、最終的に七話終盤+最終話というアレな話になってしまった…。

リズベット小説?

リズ出番少なすぎだらうー!

いつも言つのはもつとたくさん書いてから番外編的に書けば良かつた

ですね（^――^；）

総括

まだまだ直すべき点が多い多すぎるという（^――^；）
ここに上げた以外でもいろいろ表現方法等、気をつけるべき点はたくさんあると思います。そこはこれからちょくちょく書いていく内に少しでも上達することができればと思います。

さてさて、次こそはリズキリな小説を書ければなと思います。一人に小旅行？でもさせてみましょかね。どうせ時系列とか（r y

妄想が続く限り書いていこうとは思いますので、よければまた付き合つてやって下さい（^――^；）

それでは、最後になりましたが、私の様なド素人の小説を読んで下さった皆様方、SAOといづすばらしい作品を世に送り出して下さった川原礫様に感謝の辞を述べて、あとがきとさせていただきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2841n/>

君に、指輪を

2010年10月9日14時09分発行